いたずら好きな常識人、岡崎さんそれではまた

吉田（古川）優貴*

査読誌上のコラムで彼のことを何とお呼びすればよいか。普通なら「岡崎彰先生は…」などと書き出すことになろうが、初対面ですぐ「『先生』と呼ばないで」と言われてしまっている。かといって、現役の大学院生ないしは OB・OG が普段ご本人を前に呼んでいるとおり「オカピ[1]は…」と書き出す勇気もない。

仕方がないから、“さんづけ”だ。

岡崎さんは、2006 年 4 月、一橋大学に教授として着任された。かれこれ 10 年近く経ったのか、と私などは思う。個人的にも、漏れ聞こえてきたさまざまなことに思いを馳せても、限られた紙面上で語り尽くせる方ではない。突飛な言動をしがちなのに実はいたって常識人（だからこそ意図的［？］にエキセントリックな振る舞いをするわけで)、よくも悪くもエピソードには事欠かない方が、この 3 月をもって退職される。

私たち学生は光に集まる虫のように、研究に関してのみならずごく私的な相談事を抱えて、しばしばアポなしで岡崎さんの研究室に入って行ったものだ。尤も、そこは「光」というよりもむしろ「闇」の世界、YouTuber としての岡崎さんを考えれば、一橋大学のブラックホールと言ってよいかもしれない。日が暮れたら、間接灯と PC モニタの光だけが頼りの部屋だ。かくいう私も精神的に参っていたとき彼の研究室へ行き、お酒と刺身やお手製のちょっとした酒のアテになるものを振る舞っていただきながらあれこれ相談事を持ちかけたものだ。しかし、(特に夜などは）こちらの話に区切りがつくや（区切りがつかなくても隙があれば)、「ちょっと見て行ってほしい映像があるんだけど」と切り出され、そこから「ちょっと」ではなく延々と YouTube で拾ったという映像を見続けなければいけないハメになった。多くは音楽／ダンスの映像で、フツウに検索しても絶対出てこない―人類学者など用無しになるのではないかと思わされるような―映像を見せられた。単に珍しいだけでなく、何がおもしろいのか、どこに注目すべきなのかは、いくつも見ないとわからない。だから、「このままでは帰れなくなる」と思いながらも「くやしいから」見続ける。そんな展開が予測できるようになった岡崎対策万全の人々は、“映像”という言葉が岡崎さんの口から飛び出す前に「じゃあ、今日はこのへんで」と早々に引き上げるようになったと思う。

ゼミでの話は、私にはあまりできない。私も 6 年間岡崎ゼミに籍があったが、その実、ほとんど“幽霊ゼミ生”だった。大学院に在籍していた最後の 3 年間は、同じ時

---

* 明治学院大学社会学部付属研究所、研究調査員。2012 年 6 月博士後期課程修了。

[1] 人ではない方の「オカピ」は 20 世紀に入って発見された大変珍しい動物で、アフリカ大陸に生息している。「生きた化石」とも言われており、絶滅危惧種に指定されている。

間帯にあった全く別の（人類学外の）ゼミに参加していたからである。岡崎さんご自身は「そんなこと言ってないよ」とおっしゃるかもしれないが、そうすることは岡崎さんの勧めでもあった。いっそのこと移籍をしてしまえばよかったかもしれないが、誰よりも私自身が人類学のゼミに籍を置くことにこだわっていた。最近、私の原稿を読んだある人に「人類学者になりたかったのになり損ねた人みたい」と言われたが、岡崎さんの常識からしても私はきっと出来損ないの人類学徒であったに違いない。博論の審査後の打ち上げでは、岡崎さんからの一言で私が逆上してしまい、何事かを喚いて泣いて帰った（この場をお借りして、関係者のみなさま申し訳ありませんでした）。人づてに聞いたところでは、私が岡崎さんに盾突いたことになっているらしい。

そう、未熟な一学生であった私が真正面から喧嘩を吹っかけることができたほど寛容な方である。いや、岡崎さんと話をしているとつい熱くならざるを得ないというのが本当のところかもしれない。それから、（これはご自身の言でもあるが）岡崎さんが着任されてからは、特に長期にわたる調査後など引きこもってしまう院生がほとんどいなくなったくらい、本当の暗闇から私を含め学生を娑婆に引っ張り出してくださった。また、日頃から「オレは 50 歳になるまで就職できなかった」とおっしゃっているが、ポスドクになった私は密かにその言葉を励みにしている。

きわめて個人的なことばかり書いてしまった。岡崎さんが一橋大学に在任中、多くの人たちを巻き込むおもしろい企画を発案・実行されてきたことに触れておかねばならない。例えば、2006 年から 2008 年にかけての日本文化人類学会研究懇談会の企画では「人類学バトル」の「バトル興行主」として活躍された。面と向かって論じることの少なかった「熱いトピック[2]」をめぐり、そのトピックについて一家言ありそうな論客を招いてバトルの口火を切ってもらい、その後、観戦者も巻き込んで「場外バトル」を繰り広げ、最後に会場全員の投票で勝敗を決める企画だ。イギリスの Group for Debates in Anthropological Theory が口頭でやりあう議論ならではの緊張や刺激、微妙で悩ましい問題にあえて投票というやり方で決着をつけてみようという遊び精神でやっていたことが先行例としてあり、岡崎さんも数回その場に居合わせたという[3]。全 4 回の中で、2007 年に一橋大学で開催された第 3 回のバトルは特筆に値する。このバトルを書き起こしてまとめた「ポストコロニアル論争は人類学にとって自殺行為だった」（『くにたち人類学研究』第 3 号所収）は、一橋大学機関リポジトリでのアクセス数が現時点（2015 年 2 月）で 1000 を優に超えており、当日の「場外バトル」だけで

[2] 第 1 回「人類学は『役に立つ人類学』を目指すべきか」（2006 年 10 月）、第 2 回「人類学は単なる地域研究でいいのか？」（2006 年 11 月）、第 3 回「ポストコロニアル論争は人類学にとって自殺行為に等しかった」（2007 年 10 月）、第 4 回「人類学にはナショナルな伝統がある」（2008 年 2 月）が開催された。

[3] 岡崎彰 2008「はじめに」（「ポストコロニアル論争は人類学にとって自殺行為だった」『くにたち人類学研究』3: 69–138）より。

なく、さらなる場外で盛り上がりを見せた。

また 2008 年には長年スーダンで調査をしてこられた岡崎さん自ら「POP AFRICA アフリカの今にノル？！――普段着のディープなアフリカ：その美学・音楽・力学・知恵の深みにハマる 2 日間」と銘打ち、お堅いシンポジウムでも、上っ面の「アフリカ理解」を目的としたイベントでもない、研究者だけでなくアフリカに深く関わってきたミュージシャンなどもお招きした大々的な一般公開の会を実行委員長として企画された。これらの企画は多くの方々のご協力があったからこそ実現した。岡崎さんがいらっしゃるところには人が吸い寄せられるように集まってくるのである。

さらに二つほどエピソードを紹介したい。日本文化人類学会第 42 回研究大会（2008 年）での分科会「ネオリベラリズムの時代における人類学の可能性」では定員 125 名の講義室で立ち見をする人が続出するほど超満員の中、「あと 5 分だけ」を繰り返しながら延長に延長を重ね、持ち時間を大幅に超えた発表（というよりトーク・ライブ）となったが、観客は減るどころかどんどん増え、ライブ終了時には熱気あふれる会場から盛大な拍手喝采を浴びた。また、2013 年にマンチェスターで開催された IUAES 国際研究大会では、英語での発表の中で原発事故に関する映像を見せた後いきなり日本語で話し始め、聴衆に指摘されるまで全く気づかず、ハッと我に返った岡崎さんの顔を見て私たちは大笑いをしてしまった。原発事故は非常に深刻な出来事であり、笑いとは全く無縁だが、一瞬の弛みを経た私は会場でより一層深く考えることになった。イギリスで PhD を取得され、また第 1 回エヴァンズ＝プリチャード・レクチャラーに選出されており、素ではなく何らかの「意図」をもって間違って日本語で話し始めたのではないかと私は深読みしてしまう。

先の「人類学バトル」の報告の中で、岡崎さんは次のように書いている。「つまり、『バトル』とすることで、取り澄ました学会ではなく、『本気の遊び』をやる場、ちょっとあぶなくて面白い場になると踏んだのである」。岡崎さんはこの「人類学バトル」の場のみならず、いつでもどこでも「本気の遊び」を追求していると思う。これは誰しもができるというわけではない。「本気の遊び」をするための素地がなければ難しく、シロウトがやれば大ケガをするだろう。一橋大学のウェブサイト上の「研究者情報」に掲載されている岡崎さんの研究キーワードの中には「トリックスター」という語が入っているが、岡崎さんご自身がまさにトリックスターなのだ。トリックスターとは「策略をめぐらし、いたずらをして、それまであった秩序を一時的に破壊するという役割を担って神話や伝承に登場する人物や動物」[4]だ。岡崎さんが一橋大学を去るなんてとても寂しい限りだが、これからも引き続きいろいろなところにトリックスター・オカピとして登場してくださると確信している。

[4] 井上兼行 1994 「トリックスター」『文化人類学事典』（縮刷版）、東京：弘文堂、p.537。